

令和4年度 自己評価・学校関係者評価報告書

令和5年6月1日

学校法人 宮地学園

幼稚園型認定こども園 杉の子第2幼稚園

当園ではこの度、学校評価として、教職員の自己評価と学校関係者評価を実施いたしました。教職員一人ひとりが、自らの教育活動や園運営の状況を振り返ることで、自分自身や園全体を見つめ直すよい機会となりました。また、それぞれの評価結果について、皆で話し合うことにより、成果や今後の課題、改善の方向性などを明らかにすることができました。この結果を深く受けとめ、更なる教育活動の充実、教育環境の整備、教職員の資質向上に努めてまいります。

1. 本園の教育目標

「笑顔がいっぱいの杉の子第2幼稚園」

①心身ともに調和のとれた発育・発達と健全な人間性の基盤を作ること

②精神的にも肉体的にも、つよく・かしこく・たくましく・感性豊かな思いやりのある子の育成

<杉の子第2幼稚園の教育>

「教育とは、しっかりした理念をもって、子どもを伸ばすことである」～しかも、笑顔つきで～

2. 本年度重点目標・計画

<本年度の重点>

・教職員の資質・指導力の向上⇒個々の力と組織力（チーム園の結集）

本年度の合言葉「キラリン あそぶぞ エイエイオー！」⇒行事や体験活動、あそびを通して生きる力を育む

・人間的な魅力（あたたかさ、ポジティブシンキング）

・表現力、特に聞く力の育成

・個から集団へ（個を大切にしながら、集団としての力を育む）

・保育から教育へ（幼稚園らしさの追求）

・保育部・幼稚園部・預かりの連携

・危機管理（安全対策）

・人材の確保・育成

新型コロナ対策

↓ そのために

○目標と指導と評価の一体化を図る

○つけたい力、目標等を明確にし、子どものやる気、主体性を生かす展開、活動を行う

○一生懸命にやるすばらしさを体感させる

○子どもの話（声）に耳を傾ける

○年長児のモデル化、異学年の交流を図る

○「キラリン あそぶぞ エイエイオー！」⇒すべての活動をあそびととらえ、子どもたちのキラリンを引き出す

○あいさつ、「ありがとう」「ごめんね」が気持ちよく言える子どもを育成する

○情報の発信を行う

○子どもの笑顔があふれる環境づくりを行う

○詩の朗読⇒楽しく表現

○継承と発展⇒「このような子どもに育てたいから、このような取組をしていこう！」の視点で

○コロナ禍の教育課程を考え、子どもを中心とした保育・教育を実践する

※人には優しく、自分に厳しく、保育・教育のプロとして愛をもって、子どもを伸ばしましょう！

3. 評価項目の達成及び取り組み状況

評価項目	評価	取り組み状況
1 教育課程を見直し改善を図る	A	<ul style="list-style-type: none"> ・「キラリン あそぶぞ エイエイオー」の合言葉のもと、全教職員があそびの延長線上に活動や行事があるべきであると同じ方向を向いて保育・教育に取り組めた。 ・教職員一人ひとりが合言葉をもとに、練習としてではなく、あそび、チャレンジとして子どもたちの「やりたい！」を引き出せるような保育・教育を意識していた。子どもたち自身も笑顔で自信をもって、活動を楽しんでいた。 ・この1年間の合言葉として、活動のなかで意識的に用いて行ったことで、子どもたち、教職員、そして保護者と、全員に浸透し、みんなでつながることができたと感じている。子どもたちと共に存分に楽しみ、みんなのキラリンがあふれ、輝いていた。日々の生活のなかに、「キラリン」が落とし込まれつつあると感じる。 ・行事への取組は、それぞれの担当が副担任と連携しながら、子どもの今の姿、体験してほしいこと、活動への期待、意欲など、導入から終わりまでの見通しをもち、計画的に取り組んでいる。
2 職員の資質向上(研修・情報共有等)	A	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の殻を破り、さまざまな行事や任された仕事によって自信をつけていった先生方がたくさんいた。また、日々の保育・教育活動のなかで、子どものキラリンのために、意図的に子どもたちが自らチャレンジしたくなるような環境を構成するなど工夫が見られ、子どもの主体性を自然と大切に保育・教育を展開していくことができていた。 ・行事毎にねらいや目標を明確に、子どもたちといっしょにキラリンポイントがたまることを楽しみながら子どもたちのもっている力を引き出していった。意欲的に考えたり、主体的にみんなで力を合わせて一つひとつの課題を乗り越え、日々保育者が子どもと共に育つことができた。職員間でも風通しの良い温かい人間関係のなかで、自然と情報交換しながら共通理解したり、互いの刺激にもなり、園全体がキラリンでつながっていた。 ・行事ごとの反省会や公開保育など、子どもたちの姿を多角的にとらえて互いに勉強できる機会を大切にしている。このことが自分を振り返る機会にもなり、いろんな考え方にふれ、自分の保育・教育を見つめ直す大切な機会になっている。
3 特別支援教育のための園内支援体制を整備する(家庭との協力・連携も含む)	A	<ul style="list-style-type: none"> ・高知市教育研究所とも連携を図り、就学に向けて気になることや保育上の留意点、伸ばしたいところなどを保護者と相互理解し、就学前の小学校にも個別指導計画をもとに話し合っている。 ・子どもの特性に合わせて対応を考え、言い方を考えたり、カードを使ったりと、その子にあった保育・教育を見つけられるよう努力している。自分のクラスの子もだけでなく、園全体で特性を理解し関わっている。 ・クラスのなかだけでなく、園全体で共通理解できるようにし、預かり保育のなかでも、複数の目で成長を見守ることができている。 ・特定の子どもに対しての特別支援だけでなく、クラス全体としてユニバーサルデザインを活用した指示や個々に合わせた丁寧な指導、支援を行うことができた。 ・関係機関や学校、保護者とも連携しながら、子どもたちの成長を共に喜び、いっしょに見守っている雰囲気を感じられる。
4 安全管理体制の強化	B	<ul style="list-style-type: none"> ・安全面を常に意識し、園外に出るときやプール活動、行事等、その都度いいねいに事前の話し合いを重ねることができた。活動によって子どもたちの行動を予想し、マットを用いたり広い場所を使ったりして危険を防ぐようにした。 ・多様な食物アレルギーに対応するなか、食事のとり方や配慮、声かけ、給食室への相談、連携などを意識し、職員全体で給食提供ができています。 ・コロナ対策は、国や県、市の動向を見ながら、子どもたちを中心に据えて、最大限の取組を行うことができた。 ・バスの置き去り事故を受けて、以前から園で行っている確認方法を全教職員で確認、徹底した。危機管理意識を常にもつことの大事さを改めて感じ、職員一人ひとりが安全管理に対する意識を再確認した。

評価の基準 (A: 十分達成されている B: 達成されている C: 取組まれているが、成果が十分でない D: 取り組みが不十分である)

4. 総合的な評価結果

評価	理由
B	4つの評価項目について重点的に取り組み、一人ひとりの子どもを大切に質の高い教育・保育を実践することができた。また、更なる質の向上に向けた課題も明確になった。

評価の基準 (A: 十分達成されている B: 達成されている C: 取組まれているが、成果が十分でない D: 取り組みが不十分である)

5. 今後取り組むべき課題

課題	具体的な取組方法
1 教育内容	<p>コロナ禍で多くのことが制限されるなか、子どもたちが安心し、笑顔いっぱいの園生活が送れるよう子どもたちの活動を考えていきたい。子どもの生活はすべてあそびであり、あそびや体験を通して、何を感じ、何に興味関心をもち、何を学んでいるのか等をしっかり把握し、表面的な姿にとられない内面の思い、育ちを見ていくことで、子どもの「やりたい」を引き出していきたい。子どもたちの、日々の自分たちでつくり出されるあそびのなかに大きな学びがあることをしっかり捉え、子どもたちから学ぶ姿勢を続けていきたい。あそびのとらえ方がそれぞれの先生によって違う。時には保育者がリードしあそびを展開し、時として見守り、子どもが自らあそびこめるには、どのような環境と援助が必要なのか、考え追求することが今後の課題である。行事の取組を早い段階で計画的に余裕をもって進めていきたい。保育部と幼稚園部、預かりの連携の強化を図りたい。</p>
	<p>子どもたちのためにがんばる姿勢は全教職員にあるが、子どもにとって今の自分はどうか、客観視することができておらず、自ら振り返り、反省する力が弱い。活動と自由あそびがぶつ切れにならないように、子どもたちの「やりたい」「やってみよう」を十分にできる時間と環境づくりを考えていきたい。また、子どもたちがあそびを通して学ぶなかで、何を楽しんでいるか、何を経験しているかを読み取り、あそびこめる環境づくりをしていきたい。子どもたちがしたいあそびをいっしょに楽しみながらも、そのあそびを発展させたり、盛り上げていけるとよい。子どもたちの様子を把握しながら、自由あそびの時間を充実させていきたい。</p>
	<p>特別な支援が必要な子どもについては、全教職員がその子どものことを理解し、特性を把握しておくことが必要である。今後も、家庭や職員間でいいねいに情報を共有し合いながら、支援を必要とする子どもへの対応や進級後の引継ぎ、就学支援につながるように連携を図っていけるようにしたい。子どもや保護者との信頼関係を充実させ、自分たちの保育・教育力をスキルアップしていきたい。専門機関へのつなぎとして、園としての対応の仕方、方針を明確にしていきたい。</p>
	<p>引き続き、アレルギー児への対応や日々の給食確認等、連携や共通理解を図っていくことが必要である。常に危機管理を意識していくために、安全・安心に対する意識改革とともに、人員の確保が重要であると感じている。安全点検が目視で十分にできているか。もう少し全体で危険なことに目を向け、気づけるように、「気づき」「発見」「報告」を強めていきたい。地震や火災などは訓練を重ねているが、不審者に対する訓練も行っていきたい。</p>

6. 学校関係者の評価

<令和4年度後援会長>

コロナ禍でありながらも、しっかり対策しながら昨年度よりも行事を遂行し、子どもたちの笑顔が溢れていた。年長児のモデル化とあるように幼稚園部のリーダーとして年長児は特に率先して行動出来ていたと感じる。また当園は幼稚園部、保育部と分かれており、保育部のリーダーとして2歳児クラスの子どもたちもお手伝いしたり、泣いている子に話しかけたりと自分から動いているのが見受けられ、異学年の交流が図れている結果がよく現れていると感じた。

各行事には目標が設定されており、園便りにて発信している事で保護者にも分かりやすくどういう取組をしているのかを知った上で、行事に参加する事が出来た。各クラスの年齢に合った取組だけでなく、子どもたちのやりたい！という気持ちに耳を傾け、少し難しい楽曲演奏の挑戦や、1歳児の発表会での台詞挑戦にはとても感動した。達成感を味わう事ができるように先生方が一生懸命に向き合った事が子どもたちにも伝わったのではないかなと思われる。今後も子どもを主体とし、キラリン笑顔がたくさん見られる園生活を送れる事を大いに期待したい。

<あたご幼稚園園長>

合言葉を軸として園全体のベクトルを明確にしてこられたからこそ、成し遂げられたと感じる実践報告であると受け止めた。『キラリン あそぶぞ エイエイオー！』なんとすばらしいことばであろう。このことばが、子どもの主体性と直結するものであったことを見つけられた今年の足跡こそが、貴園の文化として確立され、今後ゆるぎない力になっていくと思った。ここ数年いただいていた報告からは、先生方がご自身の内側に向かって圧を強めていくような印象を感じ、少し心配もしていた。しかし、今回の自己評価からは、文書の向こう側に日々を楽しんでいる先生方の表情を容易に想像することができた。これは本当に素晴らしいことであり、貴園にとってかけがえのない力になったと思う。今後も保育を楽しみ、子ども・先生・保護者・地域、園を取り巻く皆さんが、この素晴らしい軸をブレさせずに進んでほしい。今後の益々楽しみである。

<評議員/株式会社メディア・エーシー取締役会長>

所用で年に何度か園を訪れるのだが、そのたびに感心させられるのは先生方の子どもたちに対する接し方である。ごく自然に愛情あふれるお世話を実に根気よくされている。民間企業では自社のサービスの質を検討するために「CS」「ES」という概念を用いる。「CS」は顧客満足度(カスタマーサティスファクション)、「ES」は従業員満足度(エンプロイヤーサティスファクション)のことである。従業員を大切にしていない企業は決して真の顧客満足を得られることはなく、押し付けられた決まり事やマニュアルでは長期的にモチベーションの高い職場環境を構築できない。現在の園の運営の基本が一人ひとりの先生方に根付いたしっかりとした教育方針や幼児教育における哲学を土台にしたものであると感じる。

<鴨田小学校校長>

子どもを「楽しませる」「喜ばせる」「やりたい」を原点にアプローチカリキュラムとして取り組まれていることで、子どもたちの学習に対する意欲が表情や行動に表れている。本校も、「やる気・安心・満足」をテーマに教職員が日々授業づくりに取り組んでいるので、今年度も貴園との連携を深めながら、やりたい、楽しいと思える授業を計画していきたいと考えている。

就学に向けて気になることや支援が必要な子どもたちについては、在園中から専門機関との連携や「保護者とのコミュニケーション」を大切にいただいている。入学前の個別の移行支援計画を用いて、幼稚園と小学校の円滑な対応をすることができている。

遊びや体験活動を通して、子どものもっている力を最大限に引き出している。子どもたちが遊びの中で、友だち関係も含めていろんなことに気づき、伸びているのだらうと感じる。自分のことも友だちのことも大切にしている様子が見られる。